

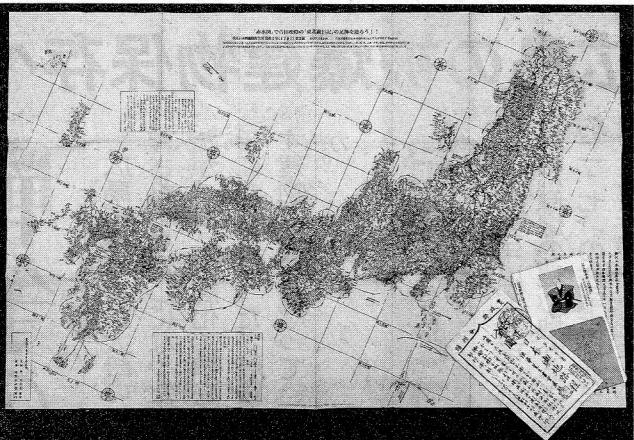
伊能忠敬より42年も前に

日本地図を作った男

佐川 春久

長久保赤水を語る

●



日本地図といえば伊能忠敬（一七四五—一八一八年）を思い浮かべる人が多いが、伊能図は江戸幕府に秘藏され、江戸時代の庶民の目に触ることはなかった。

これに対し、伊能図より四十年前に製作された、常陸国赤浜村（現在の茨城県高萩市）出身の長久保赤水（一七一七—

八〇一年）の日本地図「改正日本輿地路程全図（通称・赤水図）」は、江戸時代末期までの約百年間、ベストセラーとして版を重ねた。

浦賀（神奈川県横須賀市）にペリー艦隊が来航した頃も、庶民や幕末の志士たちが見ていたのは赤水図だ。松下村塾を開いた吉田松陰も愛用していたことが、故郷・山口県の兄への手紙に記されている。

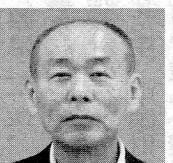
明治維新へ突き進む志士や思想家らのエネルギーが、この赤水図を基に醸造されたという見方もできるのである。

伊能図との比較で興味深い点はまだある。伊能図は全国の拠点を歩いた測量図として有名だが、赤水図は多くの情報を収集して比較検証を重ねた編集図だ。

天文学の知識を取り入れ、緯度を表す緯線（横線）と直角に縦線（ほぼ経線と同じ）を表示し、

長久保赤水が江戸時代に製作した日本地図「改正日本輿地路程全図」

さがわ・はるひさ
1949年、東京都中央区生まれ。茨城県間勤務後、市歴史民俗資料館館長などを歴任。現在は長久保赤水顕彰会会長、赤水の業績をPRする漫画・書籍集、映画監修の他、国重要文化財指定記念の原寸大赤水図の複製発行などを行ってきた。



赤水は農民として生を受けた。十一歳までに両親を亡くしたが、私塾で学び才能を開花させ五十二歳で水戸藩の郷士格（武士待遇）となり、およそ十一年後には六代藩主徳川治保の侍を携行していたと測量日記に書き残している。

「初めて経緯線の入った日本地図を発行した」（高萩市教育委員会）。実は伊能も、測量時に赤水図を携行していたと測量日記に書かれている。

赤水は農民として生を受けた。十一歳までに両親を亡くしたが、私塾で学び才能を開花させ五十二歳で水戸藩の郷士格（武士待遇）となり、およそ十一年後には六代藩主徳川治保の侍を携行していたと測量日記に書き残している。

地図製作で一貫して重要なのは、使う人の利便性と分かりやすさである。

縦八四・六九、横一二八・八九の赤水図は、利用者が携行して動くことを想定し、二十四分の一に折り畳める。現状に相違があると知れば修正を重ね、正しい情報にアップデートする努力も重ねた。

距離表示では十里（約四十キロ）を一寸（約三センチ）で表した。地名等を記した一文字目がその位置を示し、一文字が三里（約十キロ）の距離を示した。

（次回は六月七日掲載）

一般庶民に広く活用された背景には、赤水の創意工夫とたゆまぬ努力があり、これは大いに評価されていい。

近年、研究が進むにつれ、赤水の評価は飛躍的に高まり、二〇二〇年九月には関係資料計六百九十三点が国の重要文化財（重文）に指定された。

携行容易 ベストセラーに

最晩年には、二代藩主徳川光圀が始めた「大日本史地理志」編

さんに従事するよう、当時の藩主から特命が下った。

十年間に及んだ仕事を預けたことは、赤水を手放したくなかった証しともいえる。その草稿や紀行文、多くの書簡・書籍類が今も残されている。

次回は赤水図の評価が国内にとどまらず、世界各地へ広がったことなどを紹介したい。